２０２４年度 第２回 教育課程編成委員会

報告書

学校法人 センチュリー・カレッジ

専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー

century college
KANAZAWA REHABILITATION ACADEMY

理学療法学科

１．日時･場所：
　２０２４年１０月２３日（水）　１８：００～１９：３０　オンライン会議

２．出席者
⑴ 教育課程編成委員
　北谷　正浩（公益社団法人石川県理学療法士会　会長）
　西田　好克（医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院　リハビリテーション室 室長）

⑵ 本校教職員
　狩山　信生（専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 学校長）
　曽山　薫　（専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 理学療法学科 学科長）
　矢野　昌充（専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 理学療法学科 教員）
　山本　達也（専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 事務局 局長）

３．欠席者
　山崎　隆幸（独立行政法人地域医療機能推進機構金沢病院　リハビリテーション士長）

［ 敬称略 ］

４．会議次第
⑴ 開会
⑵ 校長挨拶
⑶ 情意領域の評価について
⑷ その他
⑸ 局長挨拶
⑹ 閉会

５．配布資料
・ ２０２４年度第２回教育課程編成委員会 パワーポイント資料
・ 資料１：情意領域評価基準：理学療法総合臨床実習Ⅰ
・ 資料２：情意領域 確認表
・ 資料３：情意領域評価基準（学内版）

６．議事録
⑴ 情意領域の評価について
1）臨床実習における評価の報告
（学科長 曽山／ 資料１ 情意領域評価基準：理学療法総合臨床実習Ⅰ、資料２情意領域 確認表）
・昨年度から取り組んでいる臨床実習の情意領域評価について、現３年生の実習（評価実習、臨床実習Ⅰ期・Ⅱ期、地域実習）の成果をグラフ化し、継続的な取り組みの結果を考察した。学生が情意領域の行動目標を指導者と共有しながら実習を進めたことで、一定の効果があったと結論付けた。

北谷委員）　評価結果の内容や行動目標の分野（実習全体/対象者/指導者・職員）による傾向はありましたか？

学科長曽山）指導者・職員に対する態度の「積極的に質問し、確認できる」の項目は、満点がつきにくい傾向がありました。多くの学生が情意領域を概ね習慣化していますが、全項目で満点を得た学生は約３割です。

西田委員）　情意領域の評価基準を導入したことは非常に効果的だったと感じます。指導者からの使用感についても意見がありましたが、できている学生とそうでない学生のばらつきをいかに底上げし、均等化していくかが主な目的だったのではないでしょうか。どの施設でも一定の指導項目があり、評価の質が確保されているからこそ、このような評価結果が得られていると考えられます。一つの目標と

して、一定の達成がみられたと判断してよいかと思います。
質問としては、この基準を導入する前と後で、実習を終えた学生に何か違いが感じられるかという点です。情意領域の項目は、社会人としての基本事項が含まれているため、導入前の実習でも一定の指導がなされていたかと思いますが、何か変化はありましたか？

学科長曽山）正直なところ、情意領域評価基準を使用していなくても、学生は実習を通じて多くの良い刺激を受け、行動面や学業への取り組み方に大きな変化が見られると感じています。実習自体の影響が非常に大きいと理解していますが、この評価基準を導入することで、教員も評価項目を整理し、それに基づいた視点で学生を観察することができるようになりました。その結果、学生の成長した点をより的確に捉え、評価しやすくなったと感じています。

学校長狩山）学外実習の影響が非常に大きいと感じています。実習評価表を通じて学生の行動や成長を可視化することで、教員の認識も整理されたと思います。また、今後の運用としては、現在１年次の学内科目でも評価表を導入していますが、成長や変化の実感が得られにくい状況です。これをさらに深め、学生の成長により直接つながるものにしていきたいと考えています。

教員矢野）　実習終了時の情意領域評価基準の成果については、学生が全体的に成長しているので、大きな変化が見えにくい部分もあると感じています。ただ、実習に臨む際に大切なポイントや気を付けるべき点を、教員や先輩から口頭で聞くだけでなく、この確認表を通じて学生自身が改めて再確認できることで、実習に取り組みやすくなったのではないかと思います。

西田委員）　今後の運用について議論する際、可視化することで指導がしやすくなる点は明らかです。学生自身の意識も影響していると思いますが、仮にこの評価基準がなくても同等の成長が見込めるとするならば、基本項目に加えてさらに何を求めるかを考える必要があるかもしれません。金沢リハビリテーションアカデミーの学生に特に求めたいオリジナリティや独自性を追求することも大切ではないかと感じています。

北谷委員）　実習前に評価項目が明文化されていて、学生が事前に確認できることで、モチベーションが向上し、改善の見込みが高まると考えられます。
また、西田先生のお話にあったように、対人援助職者として最低限備えておくべき基本はしっかりと押さえているので、金沢リハビリテーションアカデミーならではの情意領域の評価運用についても検討する価値があるかもしれません。
さらに、ここでは態度などを確認できるとしていますが、逆に学生が自ら説明するというアウトプットも情意領域の評価に含まれているのでしょうか？

学科長曽山）アウトプットの項目として、まず対象者に対する挨拶や言葉遣いなどの働きかけが含まれています。また、学生が点数を伸ばせなかった項目として、指導者に対する挨拶・言葉遣い、さらには「報告・連絡・相談ができる」「積極的に質問し、確認ができる」といった点もアウトプット能力として評価対象としています。

北谷委員）　「報告・連絡・相談ができる」「積極的に質問し、確認ができる」といった項目は、学生が自ら課題を認識したり、患者さんに具体的に説明する際の伝達能力に直結するため、より上位のスキルとして評価されるべきだと思います。アウトプットできる能力として、広い意味でのコミュニケーション能力や他者へのプレゼンテーション能力について、情意領域の評価項目に含めていくことも検討すべきではないでしょうか。

西田委員）　今後を見据えるならば、現状では平均点が実習前は２４点、最終的に３５点へと成長している状況を踏まえ、実習前の段階で既に最終水準に近い状態に達した学生を育成することを目指すのはどう

でしょうか。そうすることで、学生が実習に集中しやすくなり、アウトプットの質も向上し、より高いレベルの情意領域の能力を追求できると考えます。また、こうした準備が整えば、学生が実習に取り組む際の余裕も生まれ、より効果的な学びが得られると思います。

2）学内での評価の報告（学科長 曽山 ／ 資料３ 情意領域評価基準（学内版））

・学生が着実に情意領域の能力を高め、臨床実習においてもより良い成果を得るために、臨床実習における評価表を基に「学内における情意領域評価基準」を作成し、授業課程で導入する。
・学内の最終評価は、２年次の５月までに臨床実習における情意領域の評価で満点に近い達成度を目指すことを目標とする。その前段階として、１年次と２年次は段階的なステップアップができる計画を立て、学生の成長を促進する。

西田委員） これを明示することによって、他にも何か学校として変えたことはありますか。

学科長曽山） 「基礎セミナーⅠ」で社会人基礎力の講義内容に、学内で求められる具体的な行動を明示した「情意領域評価基準」を作成し、追加で提示しました。また、これまでは自己評価をせず一方的に教員側から伝えることが多かったのですが、自己評価を行ってフィードバックをするという流れに変えました。

西田委員） 学外実習を通じて学生が満点を取るように成長することは理解できましたが、同じ一年間をかけて学内で１年生や２年生が評価基準を明示することで、成長を促すことができるのか、その効果を検証することが必要だと感じました。実習における外的な要因が学生の成長にどのように影響するのか、その点についても気になるところです。

学科長曽山） 追加して行うこととして、これをテーマに学生との面接をしっかりと行い、学生が自身の行動を振り返る機会を提供したいと考えています。良い点については学生に伝え、成長を促進できるよう、フィードバックを通じて効果的なコミュニケーションを図りたいと思います。

校長狩山） 人は社会性や交流を通じて成長するタイミングがあり、その中で非日常的な体験や個人に向き合う経験が重要だと感じています。そのため、実習以外にも地域のイベントやスポーツ現場、高齢者の集まりなど、学生が積極的に参加できる場を提供し、参加を促しています。このような実習以外の経験については、その前後でしっかりと振り返りを行い、見守る必要があると考えています。
また、実習に行く前に満点を目指すことについて、点数が低い場合、学生自身が自信を持てず控えめに評価している可能性があります。さらに、教員としては、学生に成長の余地を残しておくために、意図的に低めに評価している場合もあるのではないかと感じています。

西田委員） 実習では、仲間がおらず心細く、緊張感のある環境に置かれることで、良い評価を得るために周囲の期待に応えようと行動するため、満点に近い評価が得られるのだと思います。しかし、学校内で実習と同じような緊張感を再現するのは難しいと思います。
全項目で満点を目指すことは理想ですが、学校生活の中でも習慣化できるものに焦点を当てて「これだけは身につけておこう」と思える項目について、少しずつ濃淡をつけて意識的に取り組んでいくのが良いのではないかと思います。

⑵ その他

・臨床実習前に抑えておくべき知識について（教員 矢野）

教員矢野） 臨床実習に向けて、担当する患者さんの疾患に合わせて復習を進めることが重要だと考え、その準備するように指導してきました。しかし、近年では、学生も多岐にわたる疾患を学ばなければならない環境になってきた中、最低限学んでおくべき内容は以前と比べて変わってきたのでしょうか？

北谷委員）　医療機関に入院される方は依然として高齢者が多く、単一の疾患だけでなく、複数の疾患を抱えていることが一般的です。生活習慣病を持ちながら主病名の治療のために入院し、理学療法等を受けるケースが多いです。そのため各疾患の関連性を理解していないと、単にそれぞれの疾患に対する理学療法を行うだけになってしまいます。実習指導者が学生に患者さんが持つ疾患間の関連を理解してもらうことに一番時間を要するところなのだ思いますので、特定の疾患よりも、その関係性を理解することが重要だと考えます。

西田委員）　病院ごとに特徴は異なるのだと思いますが、近年では平均年齢が上がり高齢者が多くを占めるようになっています。患者さんの背景が多様化しているため、学生にはその多様性を理解することが求められています。学生に必要な基礎的な知識としては、解剖学や運動学は昔と大きく変わらないと思いますが、最近では生理学の理解がより一層重要になってきていると感じます。生理学は難しい部分もありますが、それに興味を持ち、理解しようとする姿勢は理学療法において非常に重要だと考えています。

・委員の任期と次期委嘱についてのお願い（学科長 曽山）

⑶ 局長挨拶

以上

作業療法学科

１．日時･形式

２０２４年１０月２３日（水）　１９：００～２０：３０　　オンライン会議

２．出席者

⑴ 教育課程編成委員

東川　哲朗（公益社団法人石川県作業療法士会　会長）
田福　智幸（医療法人社団慈豊会 久藤総合病院　リハビリテーション科長）
中森　清孝（医療法人社団長久会 介護老人保健施設加賀のぞみ園 在宅部　副部長）
合歓垣　紗耶香（医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院　リハビリテーション室　係長）

⑵ 本校教職員

狩山　信生（専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 校長）
種本　美雪（専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 副校長 兼 作業療法学科 学科長）
坂下　宗祥（専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 作業療法学科 教員）

３．欠席者

山本　達也（専門学校 金沢リハビリテーションアカデミー 事務局 局長）

［ 敬称略 ］

４．会議次第

⑴ 開会
⑵ 校長挨拶
⑶ 実習到達表について
⑷ 学生 自己評価表について
⑸ 実施状況チェック表（仮称）について
⑹ その他
⑺ 閉会

５．配布資料

・２０２４年度第２回教育課程編成員会 パワーポイント資料
・実習到達表（臨床実習）　暫定版
・学生 自己評価表 暫定版
・実施状況チェック表 暫定版

６．議事録

⑴ 実習到達表について（学科長 種本／実習到達表（臨床実習）　暫定版）

・ルーブリック形式の実習到達表の導入結果について、検証報告と見直し案を提示。
評価実習と臨床実習Ⅱ期における情意領域、精神運動領域、認知領域（共通項目）の比較結果を踏まえ、学生のコメントを検証したところ、行動変容の促進と意識向上が図られたことが確認できた。しかし、最高到達点の設定が課題として浮上した。また、指導者コメント（返答率１００％）の提言をもとに、実習到達表の改定および活用方法を再検討し、修正を行った。

東川委員）　このシートは良い目標設定ツールであり、ほとんどの学生が積極的に活用していた点は評価できます。その上で、さらに改善を考えたいと思います。
１つ目は、評価項目の中で、安全管理において臨床実習Ⅱ期で指導者が２点評価を付けた学生に対して、フォローアップが行われたかどうかを確認したいです。
２つ目は、、指導者が付けた「目標設定の思考」について、臨床実習Ⅱ期で２点評価の学生が増えている理由を説明いただきたいです。作業療法の目標設定では基本的に難易度は変わらないはずですが、学びが進んでより深く考えられるようになった結果なのか、あるいは指導者から見て物足りなさがあったのか気になります。

３つ目は、実習到達表の見直しについてですが、最高到達点４点の高いレベルを削除して３点を分割したとのことですが、到達表を作成した趣旨から考えると、高い目標を設定する意義が薄れてしまうのではないかと感じました。４点を枠外に残すなどの工夫があると良いのではないかと思います。

学科長種本）　まず、到達表のレベル４については、満点を目指したい学生に対してどう配慮するかが課題だと感じています。

東川委員）　もし満点を目指す学生に配慮するのであれば、例えば“スーパーエクセレント”のように、４点を枠外に表示するだけの方法も検討いただければと思います。

学科長種本）　次に、安全管理で２点評価だった学生に対する個別フォローアップは、現在は実施しておりません。ただし、実技試験との関連性を確認していく必要があると考えています。

東川委員）　学校のフォローアップでの安全管理と臨床での安全管理には質的な違いがあると思います。臨床では予測しにくい出来事が多く発生するため、その対応力や指導者が２点評価をつけた理由をもう少し把握することが大切ではないでしょうか。

学科長種本）　最後に、目標設定が臨床実習Ⅱ期で２点評価の学生が増えている理由については、作業療法は分野ごとに違いがあることが影響しているのかもしれません。目標設定の考え方は同じですが、学生にとっては難しく感じることもあるようです。

東川委員）　作業や生活をベースにしている視点で見ると、分野が変わっても目標設定は変わらないはずですので、検証の際に考慮いただければと思います。

合歓垣委員）　指導中、コミュニケーションに課題がある学生が他の指導者から指摘を受けていなかった点に疑問を感じることがありました。これまで他の指導者の評価を見る必要がないと考えていましたが、この到達表を継続的に参照することで改善の余地があるのではと思い始めました。また、１人の学生を複数の指導者が見ていくという点では、指導者ごとの評価基準やタイミングの差も大きく、学生の成長を継続して見られるような仕組みが必要だと感じています。

東川委員）　指導者ごとに基準の違いがあることは理解していますが、臨床実習だからといって厳しめに評価するバイアスがかかることもあるかもしれません。

合歓垣委員）　また、「レベル４が高い」という理由でレベル３を分割し、最高到達点を設定したことについて少し懸念しています。実習中に指導のもとで達成できたことは、次に自立するための課題が多く残されていることを学生自身が自覚する必要があると思います。長期的な視点で目標を持ち、卒業後もスムーズに実践に移行できるよう、学生のうちから目指すべき地点をしっかりとイメージできるようにしてもらいたいと感じています。

学科長種本）　到達点の設定は難しい部分ですが、学生のカリキュラムの中の実習の最終到達点を石川県作業療法士会が示す新人育成のキャリアラダーと同等レベルにするかどうかも議論しました。学科内で検討した結果、少ない指導でもできるのであれば学生として概ね十分な能力を有していると判断しても良いのではないかという結論に達しました。

中森委員）　今回、評価実習と臨床実習Ⅱ期の比較をする中で、最終実習ということで指導者が厳しい評価をつけがちになるバイアスもあるのではと感じました。
指導者の評価の理由や根拠を学校にフィードバックし、それを学生に丁寧にフォローすることが重

要です。特に臨床実習Ⅱ期の後に改善点を踏まえ、卒業までに自己研鑽を促すように活用できると良いと考えます。

学科長種本）　思考過程については、症例報告集やプレゼンを通じた教員の指導も行っていますが、リスク管理や現場での動きのフォローアップには不足があると認識しました。実習を終えて学校に戻ってからのフォローアップも強化したいと考えています。

⑵ 学生 自己評価表について（学科長 種本／学生 自己評価表 暫定版）

・現行の自己評価表は実習が終了するごとに学校で回収をしているため、実習を経ながら学生自身が振り返りを確認する機会がなかった。そこで評価実習・臨床実習Ⅰ期・Ⅱ期の自己評価表を一冊にまとめる見直し案について説明を行った。

田福委員）　学生が自己評価を追記しながら持ち歩き、確認できることは良いと思いますが、指導者がそれを確認できる機会はあるのでしょうか。また、学校側でも確認するのですよね？ 私は、指導者が学生の振り返りや目標を先入観なく見られることが、具体的な共有につながって良いと感じます。また、罫線が少し見づらいように感じます。

東川委員）　学生が自己評価表を持ち、指導者が希望すればそれを見せてもらえる、ということは指導者にアナウンスされていますか？ また、過去に自分が記載した実習内容を共有することに抵抗を示す学生はいないでしょうか。

合歓垣委員）　私は実習の初めに面談をして、これまでの実習のことを確認していますので、自己評価表を見せてもらえると助かります。自己評価と実際の指導について確認する中で、学生が指導をどう受け取っているかについて話しやすくなりますので、自己評価表を必ず見せるようにしても良いかと思います。

中森委員）　学生が主体的に自己評価を記入していることに意味があると思います。指導者としては、それをもとにどのような行動目標を持って実習に臨んでいるかを知りたいです。振り返りをどう行動目標に活かしていくかが重要ですので、自己評価表を共有するツールとして活用できると良いですね。

⑶ 実施状況チェック表（仮称）について（学科長 種本／実施状況チェック表 暫定版）

・昨年度の指摘を受け、改訂した実施状況チェック表の最終検討を行う。記載の不十分さと実際の乖離、指導者による指導の違いを解消し、活用を図る。臨床実習Ⅱ期終了時までに全学生が主要な項目を概ね経験できるよう、経験値の確保を目指す。

中森委員）　この実施状況チェック表は経験値を整理するプロセスで活用する重要なツールとなりますので、具体的な点について詳しく申し上げます。（実施状況一覧の種別や項目の統合・分割・追加など、見直しが望ましい点を個別に挙げて説明）

田福委員）　実施状況チェック表の使い方についてですが、学生が記入するタイミングや方法も明確にしておきたいですね。例えば、毎日の終わりに記入するのか、都度記入するのか、学生が一人でつけるのか指導者と一緒に記入するのか、そして正の字ではなくレ点チェックを使うのかなどです。具体的にどのように指導者会議で説明される予定ですか？

学科長種本）　基本的には毎日提出してもらう形をとります。指導者の方にはその旨を伝えますが、指導者への負担も考慮し、無理のない範囲で適宜提出してもらうことが現実的だと考えています。また、記録は「経験したか/していないか」の有無でつけることとし、回数ではなく有無に重点を置きます。

合歓垣委員）　前回に比べて項目が細かくなり、やるべきことがより明確に見えるようになっている点が良いと感じました。指導者間や学生の経験に関する認識の差が出ないよう、実施状況チェック表を活用して、ショートスパンで共有できると良いですね。また、正の字を記入しないことで指導者の負担も

軽減されると思います。
さらに、評価項目にプログラムとしてアクティビティが含まれていますが、作業の評価も少し加えると良いのではないかと感じました。

教員坂下）　本日いただいたご意見を参考に、学生が目指すべき方向性がわかりやすい、より良いものを作成していきたいと思います。ありがとうございました。

⑷ その他（学科長 種本）
・委員の任期について

以上

（記録 橋本尚子）